我國佛教史上より見たる惠心僧都の地位の考察

高橋信教

僧都は叡智の人であり、意志強固にして人格円満謹直にして自制心の非常に強い人であつた。常に紙衣を着し粗衣粗食に甘んじ、悟道に達しても尚精進の心ゆるみなき聖者であつた。かゝる高僧が如何にして生るるに至つたか、僧都は十三才にして母の許を離れ、叡山に登嶺されている。慈父卜部氏の遺訓もさる事ながら、又天台大師仏教の其の学徒に対する戒め、十二年間学徒をして山を下る事を禁じられた制規、清原氏の僧都をして登嶺せしめられた時の決意並に其以后に於いての母としての決心が如何に堅固であつたかと云う事である。多武の峯の聖者であり且よと僧都を鞭撻し、然も僧都登嶺以后の生母との再会は生母の最後臨終時であつたと伝えられているのであるから、此の母の決意が如何に堅いものであつたかが窺える。小成に甘んぜず大成を期せんとされた清原氏の教恵とた求願が僧都をして真の善知識たらしめ、心眼を開かしめ、ゆるぎなき、高僧としての地位を後世に確立せしめんとしての尊崇と帰依とを獲得されるに到つたのである。母の大慈悲愛が僧都をして今日ならしめたのである。僧都の学究心と行業に対する精進は共に悟道その到達にあらはたのであるが、人力で成し遂き限りの努力と忍耐の精進と深さが僧都の人格を完成せしめる事因となつたのではなかろうか。貴族朝期に我國に隆盛を極めた帝都の六宗に加えて、西方八〇五最澄は、

我國に天台を伝え翌年大同元年（西ノ八〇六年）空海は眞言を伝え、前記は都市仏教として専に台密の二宗は深山静寂の地域に山嶽仏教として前七宗は顕教、眞言は密教として、何れも其の宗義の発展を見たのであるが、何れも自力道を主体とした聖道門であった。平安中葉末に輩出した、天台の学匠恵心僧都（源信）は止観の法の一として修する常行三昧より発足して寛和二年四月有名な往生要集を著した。尚其の根本思想は尚観想念仏であったとは云え、其の説く処「夫れ往生極楽の教行は、濁世末代の目足せ。道俗貴賤誰か帰せざらんや」と数多の聖典の文を引用して且つ僧都自らの体験を基礎に浄土教を学理的に組織し現世の穢土を厭じて阿弥陀仏浄土欣求の心に口に弥陀仏を唱えれば臨終時に及んでは弥陀仏が聖衆と共に来迎して定んで極楽に往生する事を教理上に根拠を与えたのである。此の往生要集の思想は明らかに念仏を主体とする願求往生の浄土思想で我國に於いては僧都に依って体系化された処に深い意義がある。許より古くは阿弥陀仏の信仰は飛鳥奈良時代に端を発しているが、例えば法隆寺所蔵橘夫人念持仏である厨子入弥陀三尊、法隆寺金堂西壁に見る弥陀三尊等は浄土思想を現わす著明な遺宝ではあるが、未だ一般民衆信仰を対照としての思潮には立ち到らなかった様である。かくして僧都の念仏思想は爾後二百余年を経て鎌倉期に到り法然上人に依る浄土宗、良忍上人の融通念仏、親鸞上人の眞宗、一遍上人の時宗等の勃興を促がす礎石となった。又僧都の生涯は名門利養の道に捉らわれず、悟道到達邁進の一途にあり、読誦、称名、修行の組閣もなく学問、規法、講説、頭陀行を修し出でては念仏の法益を説き、入りては専ら著述に専念し其の著、往生要集。一束要決。大乗対倶舎鈔等七十余部壱百数十巻を著わし、特に其の著往生要集は宋國天台屈指の碩学智礼法師をして驚歎せしめ、又本朝宮中に於ける宗学の対論には南都の碩学奮然を或は名僧智識としての修学院の学匠勝算僧正の説論を悉く論破された程で朝廷の

恩過にも再後固く是を拝辞された程で僧都の一代には其の華麗さは少いのであるが、然し日本仏教史上に高僧としてのゆうがざる地位を確立された。

又僧都の観想念仏思想は極楽に於ける所沐地仏の妙相を心想に浮かべ、これを細かく観察する手段として仏像・仏画を用ゆる事が必要とされた。所謂恵心流の画風と称せられる二十五菩薩来迎図、山越沐地画像、所沐地仏の彫像等、欣求浄土の信仰を対照として心わされた仏教美術が盛んになった。

一面当時の耽美的風潮を好む貴族顕土の社会に於ては是等欣求浄土の信仰に対して彼等の心情を捉え造寺造仏に作って眼のあたり見る浄土の荘厳や来迎の法悦裡に往生を願求したのである。やがて其後（西暦一〇五二）には、正・像・末の内、末法期に入ると徳ぢられた末法思想は、平安時代から鎌倉期にかけて貴族の心を深くゆすぶり、やがて浄土教の発達を見るに至った。

然し恵心僧都の往生思想と其の実行はあく迄和名の繋縛を離れた宗教的にも信仰的にも其の純粋性のものであった事は云うまでもない。

（一応「我国仏教史上より見たる恵心僧都の地位の考察」と題名をつけて見ましたが……。）

（望月四四生）